

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 8 月 21 日現在

機関番号：32727

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23660013

研究課題名(和文)セルフケアを促進する入院前患者準備教育を担う入院支援看護師の創生に関する研究

研究課題名(英文)A study on the nurse to practice pre-hospital patient education to promote self-care of surgical patients

研究代表者

山崎 章恵 (Yamazaki, Akie)

横浜創英大学・看護学部・教授

研究者番号：50230389

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、手術患者のセルフケアを促進する入院前教育の効果を明らかにすることを目的とした。調査に回答が得られた全国のDPC/PDPS(Diagnosis Procedure Combination / Per-Diem Payment System)対象病院のうち、術前患者教育の専門部門を設置している病院は6.8%だった。手術患者の入院前教育の専門部門が設置されている病院で働く看護師たちは、患者教育の効果を高く評価し、入院期間の短縮化による患者への影響も少ないと評価していた。手術患者の入院前患者教育は、患者のセルフケアを促進する効果があると示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study was intended to demonstrate the efficacy of prehospital education in promoting the self-care of surgical patients. A nationwide survey of hospitals introducing the DPC/PDPS (Diagnosis Procedure Combination / Per-Diem Payment System) revealed that 6.8% of the hospitals surveyed had set up a department dedicated to prehospital education for surgical patients. Nurses working for hospitals with a patient education-specialized department in place were found to highly appreciate the effects of patient education and estimate that the impact of shortened hospital stay on patients would be minor. The results suggested that prehospital education for surgical patients had the effect of promoting their self-care.

研究分野：基礎看護学

科研費の分科・細目：挑戦的萌芽

キーワード：患者教育 セルフケア 学習支援 入院支援

1. 研究開始当初の背景

在院日数の短縮化に伴い、手術目的で入院する患者は、外来において術前オリエンテーションを行うなど、病棟と外来、手術室が連携して患者の不安を緩和し、手術に向けての準備ができるように看護を提供している。また、クリニカルパスの導入によって、患者は入院期間にどのような治療・看護が提供されるのかがわかりやすくなった。しかし、術後の入院期間が短縮化されるとともに、患者へのセルフケア支援の困難が問題となっている。医療を取り巻く環境から、入院期間の短縮化は避けられない状況であり、そのなかで患者のセルフケアを促進するためには、入院前から準備教育を行うことによって学習効果を高め、患者自ら必要な情報を収集し、知識と技術を獲得できるようにしていくことが必要と考える。

2. 研究の目的

本研究は、入院期間の短縮化という医療環境のなかでも患者が主体性を発揮し、セルフケアを促進できるような入院前患者準備教育について明らかにすること、そしてその役割を担う入院支援看護師が用いる学習支援ツールを開発し、その効果を検討することである。

3. 研究の方法

(1) 全国の DPC 対象病院における入院前患者準備教育の実態についての調査

術前患者教育を実施する専門部門の設置状況と専門部門の設置の有無による入院期間の短縮化による患者への影響と術前患者準備教育の効果について明らかにする目的で、全国の DPC 対象病院 1447 施設を対象に、郵送法による自記式無記名質問紙調査を実施した。

(2) 胃切除術を受ける患者に対する入院前患者準備教育の内容と方法に関する調査

胃切除術を受ける患者の入院前の看護を提供している外来看護師と入院後の看護を提供している病棟の看護師を対象に、どのような術前患者準備教育が必要かを明らかにする目的で、半構造化面接法による質的研究を実施した。対象施設は、消化器外科外来と入院病棟をもつ 400 床以上の病院で、4 年以上の看護師経験をもち、消化器外科外来および病棟で 1 年以上勤務している看護師とした。インタビューの内容は、壮年期の胃切除術を受ける患者に対して、術前から食生活のセルフケアに対する準備教育をすることについて、外来でどのような教育を受けていると食事を開始するときに役立つか、それはどのような方法で教育するとよいと考えるかである。

4. 研究成果

(1) 全国の DPC 対象病院における入院前患者準備教育の実態についての調査

術前患者教育を実施する専門部門の設置状況について

323 施設から回答を得た。外来で術前患者準備教育を実施している施設は 231(71.5%) だった。専門部門を設置している施設は 22(6.8%) で、そのうち常設は 15 施設だった。現在専門部門を設置していない施設の今後の設置構想については、設置予定 9、現在構想中 38、必要性は感じているが具体的検討なし 189、必要性がなく検討していない 61 だった。今後の設置予定を含めると約 20% の施設が術前患者準備教育を専門部門で実施する体制を整えていた。

専門部門の設置の有無による入院期間の短縮化による患者への影響と術前患者準備教育の効果について

回収数 289 うち 281 を有効回答とした。入院期間の短縮化による患者への影響は、「患者の身体的準備が不十分」「患者の不安の緩和が不十分」「患者の手術についての理解が不十分」「患者の入院中のセルフケア獲得が不十分」「患者の退院後のセルフケアが困難」の 5 項目中 3 項目「患者の不安の緩和」「患者の入院中のセルフケア獲得」「患者の退院後のセルフケアが困難」で有意差がみられ、いずれも専門部門設置施設の方が影響を低く評価し、不安の緩和だけでなくセルフケアの獲得にも専門部門の設置による効果が表れていることが示唆された。術前患者準備教育の効果については、「術前オリエンテーションの充実」「患者の個別性への配慮」「患者・家族の不安の緩和」「外来看護の専門性強化」「他部門との連携強化」の 5 項目中 4 項目「術前オリエンテーションの充実」「患者の個別性への配慮」「患者・家族の不安の緩和」「他部門との連携強化」で有意差がみられ、専門部門設置施設の方が効果を高く評価していた。

外科病棟別の入院期間の短縮化による患者への影響、術前患者準備教育の効果について

564 の回答を得た。入院してから手術までの日数は、外科病棟 1.9 ± 1.4 日、消化器外科病棟 1.9 ± 1.7 日、呼吸器外科病棟 2.0 ± 0.9 日、循環器外科病棟 2.8 ± 1.7 日で、循環器外科を除く他の外科病棟では、概ね入院 2 日前に入院していることがわかった。入院期間短縮化による影響は「患者の身体的準備が不十分」「患者の不安の緩和が不十分」「患者の手術についての理解が不十分」「患者の入院中のセルフケア獲得が不十分」「患者の退院後のセルフケアが困難」の 5 項目のうち、「患者の身体的準備」「患者の不安の緩和」「手術についての理解」について呼吸器外科が他の病棟よりも有意に低い評価で、入院期間短縮化の影響を最も受けていないことが明らかとなった。術前患者準備教育の効果について

は、「術前オリエンテーションの充実」「患者の個別性への配慮」「患者・家族の不安の緩和」「外来看護の専門性強化」「他部門との連携強化」の5項目すべてにおいて、病棟間の有意差はみられなかった。他部門との連携強化については、他の項目よりも評価が低く、課題であることが明らかとなった。

2) 胃切除術を受ける患者に対する入院前患者準備教育の内容と方法に関する調査

消化器外科外来の看護師6名、病棟看護師7名を対象とした。看護師は、胃切除術を受ける患者は診断から入院までの期間も短く、がんと診断されたことのショックや治療に対する関心の方が高く、余裕がないだろうと考え、ほとんど手術後の食事についてのセルフケアについては説明をしていなかったという反省から、入院前から食事のセルフケア獲得に向けた教育を行うことについては、〔患者に余裕がないだろうという思い込みを見直す〕〔患者の学びたいという意思を尊重する〕というカテゴリーが抽出された。教育の内容については、〔手術による消化機能の変化を知る〕〔食事の変化について見通しが持てる〕〔食事に伴う症状や感覚がとらえられる〕〔実際の食事を画像で示し、具体的にイメージできる〕〔他の患者の体験を知る〕のカテゴリーが抽出された。方法については、〔入院前から退院後まで使えるようなパンフレットを使用する〕〔患者に知りたいことを問いかけ、質問に答える〕のカテゴリーが抽出された。”何がわからないかもわからない”という状況から、予備知識を得ることによって、わからないことを明らかにし、自分の知りたいことを学習していけるような内容や方法が必要だと考えられていた。これは成人学習者の特徴を踏まえた学習支援の方法と考える。

(3) 胃切除術を受ける患者に対する学習支援ツールの作成

胃切除術後の食事は、各病院施設によって給食内容が異なり、開始時期や食事に対する指導、栄養士が行う食事指導もそれぞれの病院で独自に行っている部分があることがわかった。そのため、患者に対する学習支援ツールもそれぞれの病院のやり方を取り入れた病院独自のものが必要であることがわかった。入院前から退院後も使用できるパンフレットを作成した。セルフケア獲得に焦点をあてた内容として、胃の解剖と機能、術後の機能変化、胃切除術後の合併症、食事に伴う症状とその対策、病院食の内容、退院後の経過と食事の変化、食事についてのQ&Aとした。

(4) 入院支援看護師の創生への課題
術前患者教育を実施する専門部門は、その必要性が認められ、DPC対象病院で設置が進められている。専門部門を設置していない場合

も、入院支援看護師が入院と手術について説明を行っている施設もある。しかし、主として教育を実施しているのは、クリティカルパスを用いての説明が多く、患者が必要とするセルフケアについては不足している。看護師は術後に必要となる患者のセルフケア獲得への教育は、入院前の段階では患者に余裕がなく時期尚早ととらえていること、セルフケアの内容を含めた教育を行うには看護師の人員が不足していることが原因と考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計7件)

高坂梓, 早出春美, 山崎章恵, 白鳥さつき: A 県の術前オリエンテーションに関する実態調査(第1報)外来における実施状況, 日本看護科学学会第31回学術集会講演集, 391, 2011.

山崎章恵, 早出春美, 高坂梓, 白鳥さつき: A 県の術前オリエンテーションに関する実態調査(第2報)外来と病棟の連携, 日本看護科学学会第31回学術集会講演集, 391, 2011.

高坂梓, 山崎章恵, 早出春美, 白鳥さつき: 長野県の外科外来における術前オリエンテーションに関する実態調査, 長野県看護大学紀要 14 巻, 61~71, 2012 年.

山崎章恵, 高坂梓, 白鳥さつき: DPC 対象病院術前患者教育の実態に関する研究(第1報) - 専門部門設置の現状と設置に向けた構想 -, 第32回日本看護科学学会学術集会抄録集, 393, 2012.

高坂梓, 山崎章恵, 白鳥さつき: DPC 対象病院術前患者教育の実態に関する研究(第2報) - 専門部門設置による術前患者教育の効果の比較 -, 第32回日本看護科学学会学術集会抄録集, 394, 2012.

山崎章恵, 高坂梓, 白鳥さつき: DPC 対象病院術前患者教育の実態に関する研究(第3報) - 外科病棟別の入院期間短縮化の効果 -, 第32回日本看護科学学会学術集会抄録集, 394, 2012.

山崎章恵, 高坂梓, 白鳥さつき: DPC 対象病院術前患者教育の実態に関する研究(第4報) - 専門部門設置による術前患者教育の効果 -, 第33回日本看護科学学会学術集会抄録集, 594, 2013.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎章恵 (YAMAZAKI AKIE)
横浜創英大学・看護学部・教授
研究者番号: 50230389

(2) 研究分担者

白鳥さつき (SHIRATORI SATSUKI)
愛知医科大学・看護学部・教授
研究者番号：20291859

(3)連携研究者

早出春美 (SHODE HARUMI)
研究者番号：10513286
高坂 梓
飯田女子短期大学・看護学科・講師
研究者番号：00457904